実践報告

国語科を中核としたカリキュラム・マネジメントの実際

――教科横断的学習の実践事例――

今　宮　信　吾

キーワード：基幹教科、カリキュラム・マネジメント、教科横断的学習

1　実践報告の背景

新学習指導要領の実施により、各教科の学習の充実のみではなく教科横断的学習の実施も求められている。合科的な学習も踏まえて、各学校現場では様々な取り組みがなされている。その原点となることは、学習指導要領にも書かれている。

「第 1　小学校教育の基本と教育課程の役割

4　各学校においては，児童や学校，地域の実態を適切に把握し，

①　教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと，

②　教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと，

③　教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと

などを通して，教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと（以下「カリキュラム・マネジメント」という。）に努めるものとする。」[1)]

また、教育課程の編成に当たっても以下のように総合的な学習の時間との関連で示している。

「学校教育全体や各教科等における指導を通して育成を目指す資質・能力を踏まえつつ、各学校の教育目標を明確にするとともに、教育課程の編成についての基本的な方針が家庭や地域とも共有されるよう努めるものとする。その際、第 5 章総合的な学習の時間の第 2 の 1 に基づき定められる目標との関連を図るものとする。」[2)]

本実践報告では、各教科領域が孤立したものにならないように、複数の教科領域を関連させて実践を試みたものを「教科横断的学習」であると捉え、実践報告と検証を加えていく。

本報告の中核として、筆者が指導に関わっている学校のうちで、本年度（2022 年 12 月末まで）に研究発表会を行なった学校の授業を中心としてカリキュラム・マネジメントの実際と教科横断的学習の実践事例を報告する。

2　カリキュラム・マネジメント実施における課題

文部科学省は、カリキュラム・マネジメントの三つの側面として次のように示している[3)]。

1　教師が連携し、複数の教科等の連携を図りながら授業をつくる
2　学校教育の効果を常に検証して改善する
3　地域と連携し、よりよい学校教育を目指す

これらに沿って課題を整理してみる。

(1) 教科横断的学習とは何か

教科横断的学習については、静岡県総合教育センターが提示している分類[4)]を参考にする。

1　横断的な学習：各教科・道徳・特別活動の枠を残しながら、特定のテーマに関する学習内容・活動を関連づけて編成する学習
2　総合的な学習：各教科・道徳・特別活動の枠を取り去って、特定のテーマに関する新たな学習内容・活動を編成する学習
3　合科的な学習：各教科のねらいを、より達成しやすくするために、各教科の枠は残しながら、一定の時間に複数の科目の類似内容を関連的に指導する方法
4　クロスカリキュラム：複数の教科、科目の指導者が、横断的で現代的な課題に関するカリキュラムを作成し、その学習を共通の理念に立って、計画的、関連的、交差的に指導していく方法
※下線部筆者

以上の 4 つの分類に関連するものを今回実践報告として取り上げる「教科横断的学習」として捉える。

(2) PDCA サイクルの保証

各学校において、授業実施後の単元計画等の見直しと年間指導計画の見直しが具体的に行われるものであると捉えている。この際に経験的カリキュラムという考え方から実践カリキュラムから計画カリキュラムへの移行を 1 年間のサイクルとして取り入れることによって、より効果的なカリキュラム・マネジメントが行われると捉えている。それらの実際については、実践の事例のところでも取り上げるが、毎年見直しながら取り組めている学校はまだまだ少ないのが実情である。

(3) 地域連携の課題

「カリキュラム・マネジメント」ということが、「教科横断的学習」に偏りがちで、地域人材や地域素材などを盛り込んだカリキュラム作成というところまでには至っていないのが実情ではないかと捉えている。かつて総合的な学習の時間が創設され、取り組みが始まった際には、各学校独自の人材リストや地域教材リストが作られていたが、それらが十分活用されているとは言えない。地域発信の場として、学習成果を伝えていくことの必要性を感じる。地域に根ざすことこそ、学校独自のカリキュラム・マネジメントとなると想定している。

3　各学校の実践事例（研究発表会実施校）

(1) 実践事例 1　大阪府和泉市立芦部小学校

令和 4 年度大阪府庁「スクール・エンパワーメント（SE）推進事業」として、令和 4 年 10 月 24 日に研究発表会が行われた。研究主題は「学校図書館を活用した、主体的・対話的で深い学びをめざす授業づくり－目的や状況に合わせて情報を選び、お互いの考えを伝え合う子の育成－」であった。

GIGA スクール構想における図書館活用による情報収集・活用を中心として ICT 活用の推進と共に、それらをより効果的に授業づくりに活かせるように、学校図書館活用を中心に取り組んできた。当日の公開授業では、2 年生生活科「ぐんぐんそだてみんなのやさい」と 5 年生国語科「和の文化について調べよう」を披露した。

生活科は、自分達で野菜を育ててそれを給食の献立に生かしてもらえるように単元設定を行った。栄養士の方や地域の野菜づくり名人をゲストティーチャーとして招き、専門家、地域との連携も図っていた。1 学期の野菜づくりでの失敗も考えてトライアルアンドエラーを経験しながら学んでいった。

国語科は、社会科や総合的な学習の時間にインターネットを使って調べる方法を身につけ、和文化を軸に総合的な学習の時間との連携も図りながらパンフレットづくりに取り組んだ。言語活動としてのパンフレットの書き方を国語科で学び、学習内容を総合的な学習の時間として深めていった。

今後の課題としては、より地域との連携を探りながらより地域に密着した学校づくりに取り組んでいくことが挙げられる。図書館活用とタブレット活用のハイブリッドでの学習も模索していく。カリキュラム・マネジメントの視点としては、(1) の教科横断的な学習の様相が強かった。

(2) 実践事例 2　兵庫県美方郡新温泉町立温泉小学校

令和 4 年度第 72 回兵庫県小学校国語教育研究会中央大会但馬大会として、令和 4 年 10 月 28 日に研究発表会が行われた。研究主題は、「表現できるおもしろさを実感し、主体的に学ぶ授業づくり」－国語科の「書く」活動を中心とした「ことばの力」の育成－であった。手書き文書とダブレットなどを使用した文章を書くことに取り入れながら、これからの時代の「書くこと」の授業の在り方にも挑戦していた。このことはカリキュラム・マネジメントの PDCA サイクルとも関連する。思考力・判断力・表現力の育成と共に、地域ならではのカリキュラム作成に取り組み、地域教材の掘り起こしも行なっている。

「書くこと」を通してふるさとに根付く学校を創ることを合言葉にしながら、小規模校で実践できる研究についての公開を行った。ふるさと湯村温泉や新温泉町の未来を発信するために表現活動を 1 年生から 6 年生の子どもたちで取り組んだ。その中で 1、3、5 年生が公開授業を行った。

1 年生は、「あらゆの『ひみつ』をかんこうきゃくにしらせよう」として、湯村温泉に荒湯を観光客に知ってもらうために、文章の順番を考えながら文章を作成していった。国語科ではみんなに知らせたいことを決めて文章を書くという設定の教材ではあるが、目的意識、相手意識を考えて書く内容を変更して取り組んだ。生活科の「あきみつけ」との関連も図りながら町探検も行った。

3 年生は、「『食べ物のひみつしょうかい』プレゼン原こうを作ろう」教科横断的な視点として、社会科「畑ではたらく人びとの仕事」と総合的な学習の時間「見つけよう新温泉町－のびのびたんけんたい－」

と関連させ、身近な新温泉町でもされている食材加工を入れて説明する文章を考えさせた。

5年生は、「私たちが考える夢と温もりの町　新温泉町」としてPISA型読解力育成にも配慮しながら、グラフや表を用いて自分の考えを裏付けながら、意見を述べる文章を書いた。「私たちが考える　夢と温もりの町　新温泉町」というテーマで意見文を書き、新温泉町長に提出した。

国語科を軸としたカリキュラムに偏りが出ないように、カリキュラム・マネジメント作成手順【図1】も作成した。また、実際にカリキュラム・マネジメントの配列表も作成している。【図2】次年度以降これに基づいてより効果的な教育課程になるようにもしている。

温泉小学校のカリキュラム・マネジメントは三つの側面全てに配慮しながら行ったことであるが、郊外の小規模校という特徴から、特に（3）の地域に根ざすということに重点が置かれている。

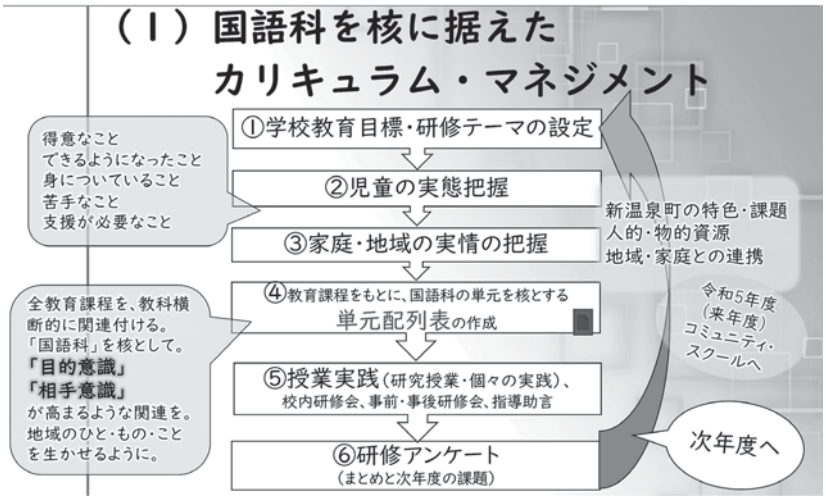

図1　温泉小学校カリキュラム・マネジメント手順

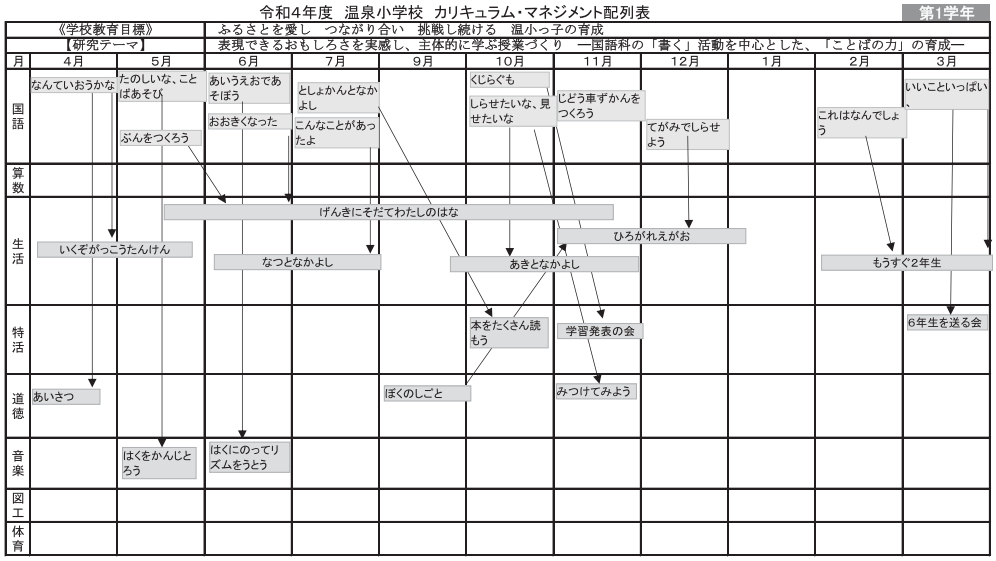

図2　カリキュラム・マネジメント配列表

(3) 実践事例 3　兵庫県伊丹市立池尻小学校

令和 4 年度伊丹市教育委員会指定研究発表会として、令和 4 年 11 月 2 日に研究主題を「主体的に学び合う子どもの育成－つながりを大切にした授業をとおして－」として行われた。カリキュラム・マネジメントを意識した学校づくりとして 4 つの C（Cross curriculum Connect Creative thinking Corperate）を大切にして授業と学校を創るということに取り組んだ。教師の主体性や児童の ICT 活用などこれからの学校を意識しながら、カリキュラム・マネジメントと評価活動に重点をおいて取り組んだ。そして、1、3、5、6 年生を公開授業として披露した。

1 年生は、生活科として「にこにこチャンネルをつくろう」ということで、笑顔になれる動画づくりに取り組んだ。他教科とのつながりとして、体育科「体育大会の表現　ダンス」国語科「群読　劇発表、ペープサート」音楽科「うたっておどろう」特別活動「お楽しみ会をしよう」を構想した。これは、研究の重点の一つの connect に重点を置いた実践である。

3 年生は、総合的な学習の時間として「伊丹未来プロジェクト　わたしが市長になったなら」として伊丹市の街づくりに関連した学習に取り組んだ。他教科とのつながりとして、国語科「はんで意見をまとめよう」「わたしたちの学校じまん」社会科「わたしたちの伊丹」図工科「みらいのまち」を構想した。この学習がこれからの総合的な学習の時間や主権者教育にもつながる内容であった。

5 年生は、家庭科として「ミシンにトライ！手作りで楽しい生活」に取り組んだ。他教科とのつながりでは、国語科「よりよい学校生活のために」を考えていた。また研究の重点である人（地域）とのつながりについては、多くのゲストティーチャーを呼んで学びを創っていた。その中で家族とも「お手伝い大作戦」「夏休み大作戦」として生かしていった。

6 年生は、社会科として「憲法で人生すごろく」に取り組んだ。子どもたちにとって身近ではない内容の憲法をより自分ごととして捉えるように工夫していた。他教科とのつながりとして国語科「私たちにできること」「聞いて、考えを伝えよう」総合的な学習の時間「卒業に向けて」特別な教科「道徳」「自由だからこそ」を構想した。

どの学年も国語科を核としながら、それぞれの教科の特性が失われないように新たな単元を構想した。教科書だけを使う授業ではなく、子どもと教師の実態に合わせた取り組みであった。

(4) 実践事例 4　兵庫県伊丹市立鴻池小学校

令和 4 年度伊丹市教育委員会指定研究発表会として、令和 4 年 11 月 18 日に研究主題を「自ら考え　表現する子の育成－課題設定、話し合い活動、ふり返りの充実を通して－」として行われた。

「主体的・対話的で深い学び」いわゆるアクティブ・ラーニングを実現するために、魅力ある追究すべき価値のある課題とそれに対する話し合い活動をより対話的に行い、学びを自覚化させるためにふり返り活動を設定して取り組んだ。そして、1、3、5 年生を公開授業として披露した。

1 年生は、生活科として「にこにこだいさくせん」としてお手伝いの意味を感じ取り、家庭の連携を受けて実践していくというものであった。家族からのメッセージや応援を受けながらダブレットを用いてプレゼンテーションを行った。

3 年生は、算数科として「どのような玉入れのコートにするか考えよう」ということで「円と球」の学習を体験的に取り組んだ。何のために「円と球」の学習をするのかを玉入れという活動との関連で捉え、

試行錯誤させながら学習を進めていった。

5 年生は、総合的な学習の時間として、「未来に目を向けよう！－SDGs プロジェクトを通して－」に取り組んだ。SDGs という大きな課題に対して、実現可能な学習にするために、「服プロジェクト」と「食プロジェクト」に絞り込み、公開授業では「食プロジェクト」を披露した。ゲストティーチャーとして、フードロスに取り組んでいる方を迎え、子どもたちの取り組みについての評価をしてもらった。

これらの授業を成立させるために、年間指導計画をカリキュラム・マネジメントの視点から見直していった。【図 3】

また、それぞれの単元においても教科横断的な学習を意識した単元構成を示して取り組んだ。【図 4】

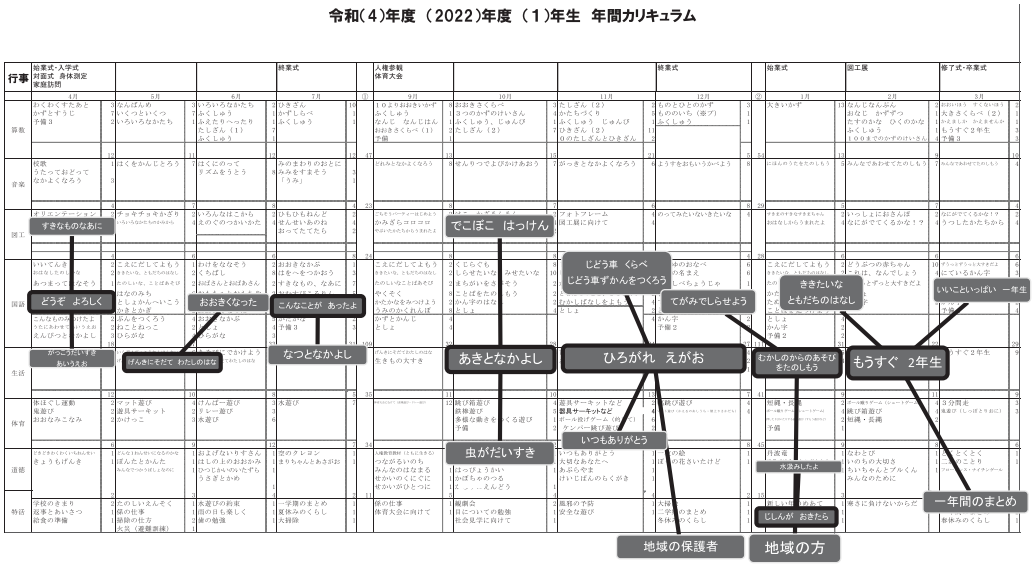

図 3　カリキュラム・マネジメントを意識した年間カリキュラム

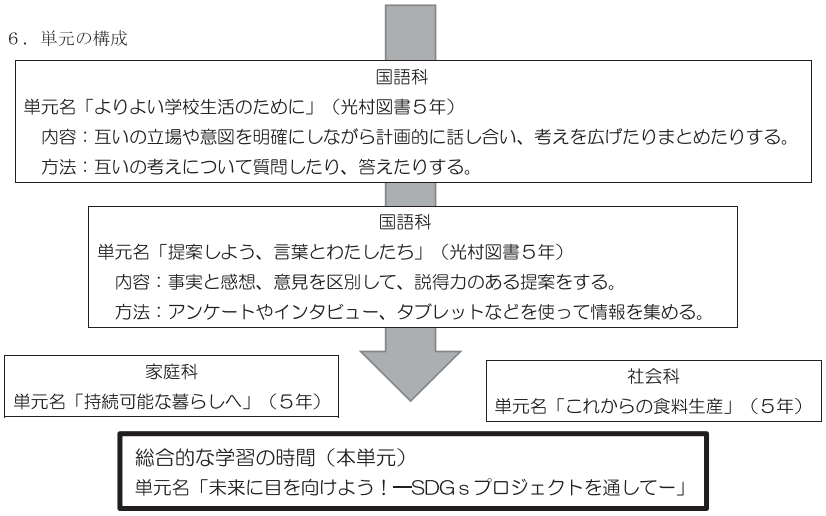

図 4　5 年生の単元構想図

(5) 実践事例 5　大阪府富田林市立小金台小学校

令和 4 年度大阪府教育庁「スクール・エンパワーメント（SE）推進事業」研究校、富田林市教育委員会研究委嘱校として研究発表会を行った。彩和学園として、2 年後の小中連携を視野に入れながら、新しい学校づくりの一端として、国語科の授業公開を行った。公開授業としては、国語科の文学教材を核にして授業を行い、単元デザインの特徴をコネクトマップとして披露した。【図 5】研究主題は、「小金色の深い学びをめざして－言葉への自覚を高め、話し合い活動の充実を図る－」ということで授業づくりをし、全学年公開として取り組んだ。文学教材が軽視され論理的な学習が重要視されている国語科の中で、文学に取り組むことによって、答えが一つではない学習ということを目指し、深い学びを実現することにした。2 年後の小中一貫校としての研究発表会を控え、新教科の設立も構想している。

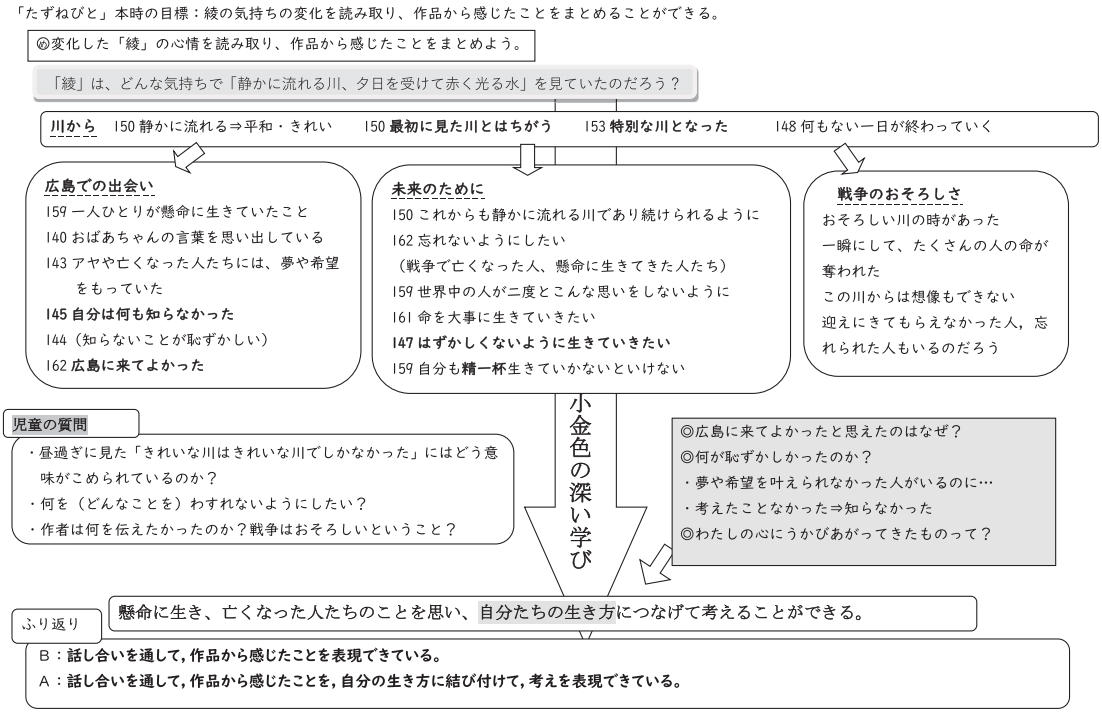

図 5　第 5 学年「たずねびと」コネクトマップ

以上 5 つの実践事例は、国語科を核として取り組んだものである。それぞれの特徴があり、実践事例 1、2、5 は、国語科を前面に出したものである。事例 3、4 は、他教科領域を支えるために国語科と関連させたものである。共通して言えることは、基幹教科としての国語科はカリキュラム・マネジメントでは外せないということである。学習指導要領でも述べられている言語活動の重点化ということはこのことを示している。

4　実践事例からみるカリキュラム・マネジメントチェック表

参観させてもらった 85 回の授業参観のうち、72 回の学校でカリキュラム・マネジメントを意識した授

業研究がなされた。その多くが国語科を核にしたものであり、ことばによる学びの展開を意識していた。そこで示したことをまとめてカリキュラム・マネジメントのチェック表として提示する。

〈授業前〉

□　課題設定は適切か

□　教材選択、教材開発がなされているか

□　対話活動が設定されているか

□　学び方の基礎・基本を捉えているか

〈授業中〉

□　発話・発問は適切か

□　机間指導（個別対応）が必要な設定になっているか

□　状況判断ができる柔軟な授業デザインか

□　アセスメント評価が設定されているか

〈授業後〉

□　総括的評価が行われているか

□　診断的評価が行われているか

□　授業改善の方向性が見えているか

□　学びモデルの形成ができているか

なお、多くの学校での教科横断的学習のスタイルは以下の 3 つに分類できた。

①　学習内容（知識）でつなぐカリキュラム・マネジメント
SDGs や社会科の地域学習など

②　技能でつなぐカリキュラム・マネジメント
新聞の書き方、話し合いの仕方など

③　言語活動でつなぐカリキュラム・マネジメント
パンフレットづくり、討論会など

5　今後の課題

上記のチェック表を踏まえながら、今年度の授業研究からわかったことをまとめ、この先 10 年程度を見越した課題を列記してみる。

(1) 教科横断的学習と評価

複数の教科を一緒に取り組むことで評価をどのようにするのかが課題となる。特に実践事例 3、4 については複数の教科を同時に行うことによって、子どもたちの活動を複数の視点から評価することになる。特に総合的な学習の時間を内容として取り組んだ場合に、内容面は総合的な学習の時間として、技能面は国語科としてというように明確に分けられるものとそうでないものがある。単元全体における評価の方法を模索する必要がある。現在わかっていることとして、単元全体として子どもたちの自己評価を取り入れ

ることを考えている。

(2) 年間指導計画の作成と修正

働き方改革として教師の労働時間の問題や作業効率の問題もあり、学年で取り組むことが難しくなっている。しかし、チーム学校として学校のカリキュラムを作成することは必須事項であり、目の前の子どもたちに合わせた修正も PDCA サイクルの一つとして取り組まなければいけない。作成と修正を無駄な時間と捉えるのではなく、より子どもに寄り添うという視点で行うことができるように、時間の確保と作成修正方法の明示が必要である。一つの方法としては長期休暇の研修に組み込むか各教育委員会主催の研修会で一斉に行うなどの方法も模索する必要があるだろう。4 月に作成した実施カリキュラムが授業実践を通して、修正し、計画的カリキュラムとしてカスタマイズするサイクルをつくることも必要である。実践事例 1 で紹介した芦部小学校は夏休みに各学年のふりかえりをしている。【図 6】

	教科	学習活動	思考ツール	その他
ひまわり	自立活動	畑プロジェクト 成長・お世話の仕方　工作・食べ方	ステップチャート ウェビング	高学年から低学年へ 地域人材活用
1年	生活	季節に合った和菓子工作 季節について	ウェビング Xチャート	マイディクショナリー（単元ごと） 詩や書く活動　話すきくタイム
2年	国語	うれしくなることば 言葉集め、分類　自己肯定感を高める	ウェビング X, Yチャート	生活　野菜作り ステップチャート　X、Yチャート
3年	社会	昔の道具 今と昔を比較する	ベン図 マトリクス	国語　人をつつむ形 家の特徴
4年	図工	キャラクターづくり キャラクターの要素として必要なこと	X,Yチャート	国語　子ども達の話し合いたいことを学習課題に　ロイロで共有
5年	国語	和の文化を調べよう 主張は何か、観点ごとに整理 伝えたい順を考える	フィッシュボーン ピラミッドチャート	将来的に子どもたちが自分で思考ツールを使いながら考えを深められたらいい。思考ツールを経験させる。
6年	算数	文章問題の読み取り 応用問題も解けるように	フィッシュボーン ステップチャート	個人内の目標設定 情報の位置づけ　ピラミッドチャート コンセプト図　色々な教科で使ってみる。

図 6　学習活動と思考ツールの見通し

(3) 地域連携、地域素材の開発

地域に根ざすということは、その学校でしか学べないことが明確になるということである。そのためには、地域連携のために人材活用を積極的に行うことが大切となる。かつて総合的な学習の時間が始まった時に、地域人材、施設バンクというものを作成した学校もあったと思う。これらを再度作り直して活用することでその学校ならではのカリキュラムが作成できる。また、そのためには、地域素材を活用した教科横断的学習の創造も必要となる。余分な仕事という意識を無くすために、カリキュラム・マネジメントによって地域から信頼される学校づくりを促したい。実践事例 2 の温泉小学校のようにコミュニティ・スクールをめざすことも一つの方法だろう。

(4) 育てたい学力の定義の明確化

中央教育審議会の答申（2021）[5]によって、令和の日本型学校教育が提唱され、それに向けた取り組みも始まっている。2022 年度で高等学校までの学習指導要領の実施が完結し、幼児教育から高等学校まで

の一貫した教育も求められている。カリキュラム・マネジメントという方法論が先行するのではなく、それぞれの学校独自の課題に沿って、必要感のある学力観を形成していくことも必要である。都市部の学校ならではのカリキュラム、郊外ならではのカリキュラムというように、育てたい学力とカリキュラムが一致したものとしたい。そのためには、答えをどこかに求めるカリキュラム・マネジメントではなく、答えを創造するカリキュラム・マネジメントを期待する。

(5) STEAM 教育との接点（学校間接続の問題）を探る

21 世紀型学力とも言われ、新しい教育内容が求められることは society 5.0 の時代には必要なことである。高等学校で探究型の教育が求められ、STEAM 教育の実施も期待されている。国際的な学力指標としての PISA 型読解力として【図 7】のような定義がされているが、STEAM 教育と①から③の能力を考えた時、関連が測れるようにも思う。義務教育学校、中等教育学校など学校間接続の問題とカリキュラム・マネジメントを切り離すことはできないように思う。カリキュラム・マネジメントが STEAM 教育と連動することによって、現在各教科ごとに分かれて提示されている学習指導要領が学習内容を選択できるようなものになることが教育改革の今後の目標になるのではないだろうか。

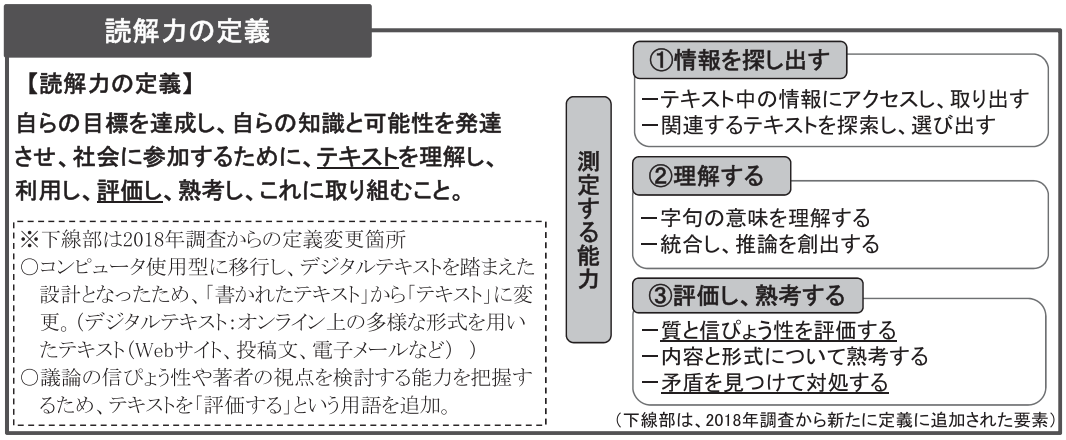

図 7　読解力の定義[6)]

引用・参考文献

1）文部科学省『小学校学習指導要領総則編』2017 年 7 月
2）同上
3）文部科学省『カリキュラム・マネジメントの「三つの側面」』2020 年 1 月 17 日
4）静岡県総合教育センター「横断的・総合的な学習に関する用語の定義・意味」
5）中央教育審議会答申『令和の日本型学校教育の構築を目指して』2021 年 1 月 26 日
6）文部科学省・国立教育政策研究所『OECD　生徒の学習到達度調査 2018 年調査（PISA 2018）のポイント』2019 年 12 月 3 日